

随 想

奥出雲に「たたら吹き」の里を訪ねて

(株)フジコー 特別技術顧問

堀川 一男

Kazuo Horikawa



当社の主要製品であるC.P.Cロールは中国地方にある山陽工場で製造しているが、中国山脈地帯ではわが国に近代製鉄法が導入される迄の永い間、武器や農機具或いは建築用金物等の鉄を造るために「たたら吹き」が盛んに行われていた。現在でも島根県にはわが国唯一の「たたら吹き」の遺跡があり操業も伝承されているので、日頃同じ地方で鉄関係の仕事をしている者として是非一度は視ておきたいということになり、社長のお勧めもあって、山陽工場の工場長以下5名の幹部技術者達と平成7年11月17日の朝、島根県飯石郡の吉田村字菅谷を目指して出発した。鴨方の工場から福山、三次を経て掛合から右折して山道へ踏み入った。幸い快晴で空は碧く空気は澄み、山々は紅葉して錦織の様に綺麗だった。四囲を中国山地特有の500~600mのなだらかな山々に囲まれた海拔約300mの山間には、「やまたのおろち」の故事や「金屋子神」が白鷺に乗って此の地の桂の木に飛来した伝説などが息づいている。古くから鉄生産の歴史と共に歩み、かつてはたたら火が此処彼処に燃え上がっていたのであろう。今でもたたら師の子孫が生存する集落の「山内」や、国が指定した唯一の「菅谷たたら(国指定重要有形民族資料)」があって、村そのものが生きながらの博物館である。

先ず「鉄の歴史村地域振興事業団」の事務所に坂本事務局長を訪ねて説明を聴いた。近くの横田には日刀保(日本美術刀剣保存協会)が全国の日本刀製作者向けの材料を一元的に確保するために文化庁の補助金を受けて毎年1月中旬から2月の中旬にかけて4回操業している(株)鳥上木炭銑工場のたたらがあるが、菅谷のたたらは鉄の歴史村地域振興事業団が

村おこしの目的で毎年11月から3月にかけて2~3回吹いて操業や用途の研究を行っている。横田の一代(一回の操業)が昔ながらの3昼夜なのに対してこちらは約30時間と短く、炉もやや小さい。炉は水分を嫌うので土を深く掘ってビニールシートを敷き、その上に厚さ70cmの乾燥した砂と10cmのカーボン煉瓦を積み重ね、更に木炭灰30cmを搗固している。炉の外殻には耐熱鑄鉄製の型の内側に耐火キャストブルを裏張りしたケースを用いており、粘土質の土と砂質の土を混ぜて築炉し、1カ月間乾燥させる。羽口は左右に4本ずつあり、「ふいご」はモーターによる連続送風で代用している。今朝7時に「火入れ」をしたので「鉚出し」は明日の午後になる。今回はNHKの取材班と静岡理工科大学の調査チームも来ているとお話だった。早速裏手の小高い丘の上にある高殿(工場)の現場に案内して貰った。一步踏み込むと薄暗い屋内の真中に長さ2m、幅1m、高さ1.2mほどの炉があって赤々と炎が立ち上がりゆらめいている。此れこそ錬金術の火である。屋内は炎の発する煙と舞い上がる床の土や炭の微塵が立ちこめ、鑄鉄工場特有の臭気が鼻をつく。壁に沿った隅には作業員の詰所、原料の砂鉄や木炭或いは道具類の置場などがある。「ふいご」の代わりに送風機だけが近代を感じさせる。やがて、炎を食い入る様に観ていた若い白井康裕「村下」(技師長)らは緊張した面持ちで木製の平らなシャベルで砂鉄20kgを静かに炉内の炎にふりかけ、次いでその上に竹製の箕で木炭を装入する。これを約40分毎に繰返し、時々自然木の先に金具を付けた棒でノロ穴をつついて炉内の状況をうかがっている。

私は27年前に日本鉄鋼協会がこの近くで行った「たたら製鉄の復元」事業の計画と研究の両委員会委員を兼ね、送風機用にNKKの当時の鶴見製鉄所にあった2HPのシロッコファンを都合したり、昭和44年11月4日には操業にも立ち会ったので大変懐かしかった。「たたら吹き」の原形は朝鮮半島から伝来したかもしれないが、独創的な考案を重ねて発展させたのは日本民族である。低温溶融による直接還元製鉄法として世界に誇れる技術であり、その優秀な製品は日本刀を作るのに不可欠である。しかし生産性が劣るので近代製鉄法に駆逐されて戦後は火が消えた俣になっていた。父から子、孫へと密かに伝授された技術であり、科学的計測法が無かった時代のことでもあるので、詳しい記録は遺ってなかった。当時たたら吹きの実験者の平均年齢は80才に近く、今を逸したら埋没してしまうとの危機感から再現して操業記録と各種の計測値を残そうと企画したのだった。堀江要四郎(83)、福庭太蔵(83)、中村佐助(89)、本間健次郎(70)の4名の村下達は藍染木綿の仕事着に黒い靴、作業用の帽子という姿で、総て古式に則って悠然黙々と作業を進めてくれた。炉体も大きくて威圧感があり、身の引き締まるような厳粛な雰囲気漂っていた。記録は岩波映画製作所が「和鋼風土記」に収録した。今回来て村下達が皆他界した事を知ったが、当時炭運び等の手伝いをしていた雨川輝男さんが元気に働いていて、あとで再会の杯を交わす事が出来たのは感慨無量だった。

見学を終えて坂道を降ると周囲の景観に相応しくない異様な品物に出喰した。表面が薄く錆びた7t鋼塊4箇が横たわっていた。これは四国松山の白鷹幸伯氏が薬師寺再建用の釘6000本を鍛造するとき、古代の釘のように1000年以上保たせたいとして東北大学の井垣先生に相談され、先生の要請でNKKが純度の高い鋼(C 0.086, Mn 0.01, S 0.002各%)を造り、その残材を

此処に寄贈したものであった。我々は「吉田グリーンシャワーの森」の丸太小屋風コテージに泊まることにした。閑静な標高450mの山の中腹に位置し、目の前に山並みが望めて自然を肌で感じる事ができた。

バーベキューとビールが快く喉を通る。小屋に入って車座になりアルコールのグラスを傾けながら夜更けまでたたらやC.P.Cについて熱っぽく語りあった。

翌朝目を覚ますと小鳥が囀っている。午前中に菅谷たたら、山内生活伝承館、鉄の歴史博物館などを訪れた。菅谷たたらの里は村の入口に桂の大木があり、高殿、元小屋、大銅場が並び民家が連なっている。高殿は雨降りでも濡れないように江戸時代に建てたもので広さ100坪、高さ9m余の杉皮葺きで、中央にある炉の寸法は縦3.3m、横1.4m、高さ1.25mである。17世紀後半に開設され明治16年から大正10年まで連続操業し、明治39年に足踏吹子から水車送風が変わった由。午後は小刀の鍛冶作業を見学し、静岡理工科大学の志村先生の「たたらと半導体結晶」の講演を聴き、「吹止め」を見に再び丘の高殿へ。送風が止められ、炎は勢いが落ち、やがて消えた。鑄鉄製のケースに鉤状の鉄具を引掛けて取除き、炉体を突いたり引張ったりして壊した。高熱危険だからと出来た鉄は見せて貰えなかった。その夜は吉田村主催の打上げパーティーに参加し、三日目は出雲大社に参拝して、快適で感動的な旅を終え帰途についた。昔、たたら師達は職責を果たす為に齋戒沐浴して神に祈り、永年蓄積した経験と研澄まされた勘を頼りに終始全身全霊を操業に打込んでいた。ところが近代工業では学理に基づく合理的な作業方案を計器とコンピューターを駆使して実施するから、熟練や勘はなくても均質な製品が生産できるとまで言われている。しかし近代工業でも立案、運転或いは改善は人がするのだから、矢張りたたら師達の心意気は見習うべきだと思う。